

球磨川流域に甚大な被害をもたらした2020年熊本豪雨は、4日で発生から5年となりました。犠牲になられた方々に哀悼の意を表するとともに、復旧・復興に取り組む地域や関係機関の皆さまに心より敬意を表します。

国土交通省九州地方整備局は、熊本県や地元市町村と連携し、流域が二度と同じ惨禍に遭わないよう全力で復旧・復興に取り組んできました。その要となるのは流域治水プロジェクトの推進。「命と環境が両立する『緑の流域治水』の推進」を掲げ、ハード・ソフト両輪の対策を進めています。

国の事業では、これまでに約250万立方メートルの河川内土砂の掘削が完了し、輪中堤、宅地かさ上げ、引き堤、遊水地についても地域に寄り添いながら鋭意進捗を図っているところですが、加えて、水系全体の土砂・流木対策として、砂防事業も着実に進めています。

川辺川の流水型ダムについては、昨年10月に環境影響評価レポートを取りまとめ、27年度の本体着工に向けて設計や手続きを進めています。「清流川辺川」を未来に継承するた

# 緑の流域治水と復旧 全力で

前国土交通省九州地方整備局長 森田康夫



め、環境保全・創出に極限まで取り組み、治水と環境が両立した世界に誇れるダムとして35年度完成を目指します。

そして、当ダム事業で最も大事なことは、五木・相良両村の地域振興です。最初のダム計画発表から約60年がたちました。両村の皆さまには苦渋の決断の末、先祖伝来の土地を提供していただくなど、多大な協力をいただいていたことを忘れてはなりません。

現在、五木村の生活再建として平場盛り土の整備に一部着手したところですが、これまでの経緯と両村の現状を踏まえ、国と県が連携して「ひかり輝く」新たな五木村振興計画や「相良村復興むらづくり計画」の実現に、全力で支援・協力していきます。

交通インフラの完全復旧も地域に

は欠かせません。国が権限代行で実施している球磨川沿線道路の復旧事業では、これまでに国道219号の人吉市側約11キロと被災橋梁10橋のうち2橋が開通。残る8橋も全て上部工事に着手しています。難工事である被災道路のかさ上げも、片側交互通行など地域の皆さまの協力を得ながら、着実に進めているところです。

本年度は新たに国道219号の八代市内・同市坂本の約9キロと、坂本橋、松本橋、天狗橋の3橋の開通を予定しています。

一方、不通となったJR肥薩線については国、県、JR九州による検討会議の議論を経て、球磨川沿線区間（いわゆる「川線」）を鉄路で復旧し、33年度の運行再開を目指すことができました。九州地方整備局としても、国直轄で実施する河川・道路の復旧事業と鉄道施設の復旧事業が関連する区間について、JR九州などと調整しながら、速やかな復旧に向けて連携・協力を図っていきま

す。

人吉球磨地域には、国宝の青井阿蘇神社、球磨川下り、球磨焼酎、人吉温泉などの観光資源が豊富にあり、司馬遼太郎はこの地を「日本でもっとも豊かな隠れ里」と称しました。被災前の肥薩線には明治・大正期に造られた鉄橋などの鉄道遺構も数多くあり、私も特急「かわせみやませみ」に乗って、たびたびこの地を訪れたものです。

私は、熊本地震の発生時に熊本河川国道事務所長として、熊本豪雨では九州地方整備局長として、国による現場の災害復旧を指揮しました。多くの思い出を得た熊本は「第二の故郷」と呼ぶべき存在であり、離任に当たって後ろ髪を引かれる思いを禁じ得ません。

引き続き八代河川国道、川辺川ダム砂防、八代復興の現地3事務所がスクラムを組み、九州地方整備局は全力で人吉球磨をはじめとする被災地域の復旧・復興に取り組んでまいります。

熊本県内で死者・行方不明者69人（災害関連死2人含む）を出した2020年熊本豪雨から5年が経過した。被災地の復旧や川辺川の流水型ダム建設に関し、国土交通省と市民団体の関係者に寄稿してもらった。

もりた・やすお 三重県出身。京都大学部卒。1988年に建設省（現国土交通省）入省。熊本河川国道事務所長の在任中に熊本地震が発生し、災害復旧を指揮した。九州地方整備局長を6月まで1年間務め、7月1日付で退官。59歳。